

CONTENTS

- 2 情熱の奥州人
- 4 読書の秋 図書館の秋
- 8 平成 21 年度 決算
- 12 国保税負担の引き上げを検討しています
- 14 衣川バス星空号の運行情報
市土地開発公社の売地情報
- 15 市の出来事から
- 16 まちの話題
- 18 つながれ 広がれ NPOの輪
- 20 子育て広場
わが家のアイドル
- 21 地域安全情報
市長コラム「おうしゅう羅針盤」
お元気レシピ
- 22 キラリ人輝く
夢トーク
- 23 クラブ紹介
ぼんたのつぶやき
- 24 くらしの情報
- 28 奥州遺産

〈今月の表紙〉



生母地区第一区集落営農組合（三浦栄一組合長）がEM菌を使ってもち米を栽培するほ場で9月17日、赤生津小学校の児童が稲刈りを行いました。青空ものぞく、児童と組合員らは、手刈りやホニオ取りなどで心地よい汗を流し、交流を深めました。11月には収穫祭が行われる予定で、収穫した米でもちをつき、一緒に味わうそうです。



大治さん（右から2人目）、修学旅行で訪れた堺上高校（大阪府堺市）生徒と

青空へと続く牧草地、実りの秋を迎え、金色に輝く棚田を望む千田牧場。酪農経営を夢見る父瑞郎さん（故人）と母アエ子さんが、この地に開拓に入った昭和39年に幸江さんは生まれた。幼い娘に父が語る熱い農業への夢。その言葉は、幸江さんの心に農業へのあこがれの種をまいた。

高校を卒業後、会社勤めの傍ら、両親の手伝いをしていた幸江さんに、決断のときは突然訪れた。「ある晩残業を終え帰宅すると、娘をおんぶして搾乳する母の姿が……。心の中にある慢心と甘えに『はっ』とし、涙があふれ止まらなかった」と農業で生きる決意を固めた当時を振り返る。「自分でものを作り、食べる。農業は『生きること』そ

のもの。自分の手間暇が成功にも失敗にもつながる」と農業の魅力に目を輝かせる。

稲わらと堆肥の循環型農業と減農薬栽培にこだわりを持つ幸江さん。平成7年8月、旧江刺市初の女性認定農業者に、平成12年には人工授精師資格を取得するなど、こだわりだけでなくプロとして確実に技術を身に付けていった。

3年前に再婚した大治さんの勧めもあり、ことしの春からグリーンツーリズムの受け入れを始めた。「物を作るだけでなく、農村生活が持つ価値を多くの人に知ってほしい。都市と農村、人と人が交流循環する関係をつくりたい」と夢を描く。いずれは農家民泊もと、幸江さんの情熱あふれる挑戦は、まだまだ続く。



①

ものをつくり、食べる。
農業は『生きること』『そのもの

千田 幸江さん（46歳）
江刺区玉里字巽沢



ちだ・さちえ◎ 1964年江刺区玉里字巽沢生まれ、1990年から専業農家。繁殖和牛33頭、水田3.5畝、ブルーベリー10畧を経営。夫、母、娘と4人暮らし。